



春の王国

二人の門出に祝福を！王様は云いました。昨日まであった寂しさは嘘のように身をひそめ、晴れやかで尊大な態度が彼に戻っていました。二人は天馬にまたがり皆に手を振ります。土の下には多くの学者たちが永遠の眠りについていました。



この場所は夢の王国で王様には玉のようなお姫さまが一人いました。この国には言い伝えがありましたが何年も戦がないこの王国では人は畏れを忘れてしまつて、ただのおとぎ話として笑いの種になっていました。悪魔なんて存在しないと子供たちも笑います。しかし人々が平和を謳歌するその裏で悪魔は世に出る機会を伺っていたのでした。今がその時でした。

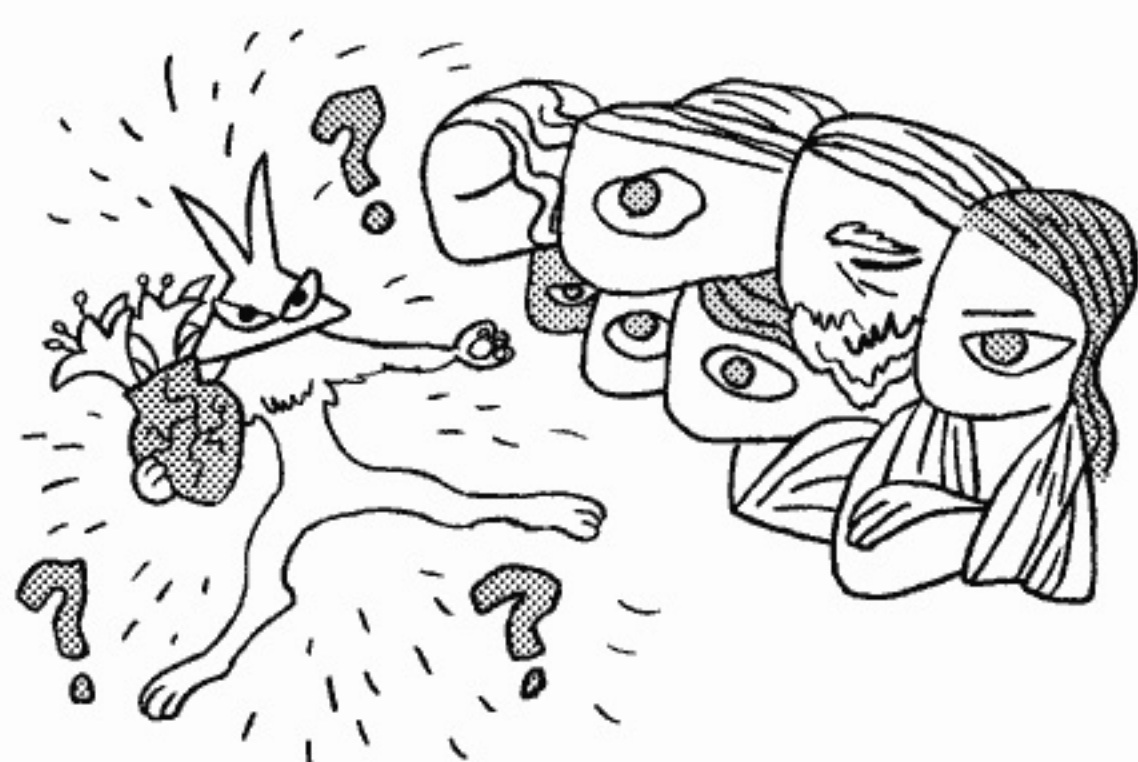
ある日のこと、王国の庭園で古い記憶と懐かしい匂いに気を取られたお姫様は悪魔に魂を取られてしまいました。この庭園には種類が多過ぎて王様が命名できない花が咲き誇り、季節はいつも春に保たれていました。そんな偽物の春の陽気の中、悪魔は王様を呼びつけてこう云います。「姫を返してほしければおれの名前を見つけろことだ」。王様は姫を助けた者を姫の婿にすると触れを出しました。国中から聡明な学者や哲学者、法律家がお城に集まつてそれぞれが悪魔の名前を考えます。悪魔はそれを嘲笑いながら姫の魂を弄びます。「おまえらには無理だ。頭でっかちめ！」。季節は春から冬へ、そしてまた春へと三度巡りました。それでも悪魔の名前はわかりません。学者たちは国中の文献に当たり悪魔の名を探します。季節はさらに何周も巡りました。何度調べても、遠くの国へ便りを出しても、国中の霊媒師を呼んで占わせても悪魔の名前はわかりませんでした。そのうちお城で亡くなる学者が出てきました。学者たちはもともと高齢だったのです。「友よーわたしが必ずつきとめます」。また一人、また一人と人数は減り、姫も姫とは呼べない年齢になりました。いつか名前がわからず諦めて即興に走った人間たちに痺れを切らした悪魔は云います。「もうよいーおれは地獄へ戻るから用があったら地獄へ来い」。



その時でした。悪魔と付き添っていた姫が云います。「ええい洒落臭い！悪魔よ、おまえは答えない問いを尋ねたにすぎない。前提のない不毛な問いだ。しかしどちらにせよ私の魂はおまえに取られ、おまえと共にあるのだ。ならばいま一度おまえを私の一部として捨て置く。やがておまえは新たに草木が芽吹くように私の子となり婿となるのだ」。悪魔は驚き悪態をつきながらぼろぼろと崩れ土に変わってしまいました。姫は皆を集めてこう云いました。「この土を集め鉢に入れそこで柗榴を育てるのだ」。

柗榴はすくすくと育ちやがて実をつけました。その実を食べた姫は子を産み、その子はやがて立派な開拓者となって近くの荒野を耕し、そこに国を構え一国の王となりました。ぎらぎらとした日差しが降り注ぎ緑が鮮やかな夏の王国でした。この国で姫は王と共に民を束ね、末長く幸せに暮らしましたとさ。

おわり「春の王国」



燃焼終了、切り離します。

○季節は春から夏の途中、今は梅雨に入っている。今年も雨が少ないのだろうか？猛暑が普通になってしまつて久しいが、地球もこの宇宙空間を飛び続けているのだから人間が感じる気候が変化するのも当たり前なのだろう。こんな感じでマクロからメタな話まで思考が飛躍しながらもこのペーパーのために文章を書いている。

○さて、今年も半分を過ぎたけれどこれを読んでいるあなたは何か良い思い出ができましたか？そしてこれから半年間の目標はありますか？自分は去年より体調も良くさっぱりした日が増えたので、しばらく読めなかった紙の本を読むことと、こんな感じで制作を続けたいです。

○俗世から距離を置いてしまった自分のような人間には世間はループのようで忙しそうだなあと他人事のように眺めてしまう。そんな中で自分は何を基準にするか心の拠り所をどこに置いて生きていくか、ということは考える時期なのだろうと思う。最近目にする広告や文化は感情が強くてどうも生きづらい。結局のところ感情に吞まれやすい私たちは幸せというものを判っているのだろうかなんてね。さあ、天変地異でも起きたらいいですね(知らん)。